

山白朝子『エムブリヲ奇譚』

0. 初めに

DMSにおいて例会を行うのはこれで三度目である。一度目は東雅夫編『文豪怪談傑作選 明治篇 夢魔は蠢く』で、二度目は三津田信三『ついてくるもの』で行ったと記憶している。今回は山白朝子の『エムブリヲ奇譚』で行う訳だが、この短編集は完全なる怪談・ホラーからファンタジーやSFの様な物まで多種多彩な種類の作品が揃っている。この様な怪談やホラー・ファンタジー・SFといった諸ジャンルがミステリにおいて時に間接的に、時に密接に繋がりにあっている事は言うまでもない。その点から考えてみれば、あながちDMSにおいて取り上げるのが的外れな作品とは言えないのではないだろうか。いやむしろ、隣接的なジャンルを取り上げる事によって、逆にミステリとは何かという理解の一助になると考える事も可能なのである。

今回はその様な観点から、ミステリと怪談・幻想小説・ホラーの大体の構造上・性質上の違いを取り上げて、怪談・幻想小説・ホラーの基本的作法とは何かという点を概説して行きたいと思っている。其処で、最初は各作品に関する議論を展開し、後に『エムブリヲ奇譚』全体を見て議論を行う事としたい。

では、まず著者の簡単な紹介をした後に各作品の説明に入りたいと思う。

1. 山白朝子プロフィール

2005年、怪談専門誌『幽』でデビュー。著書に『死者のための音楽』がある。趣味はたき火。

・著作の特徴としては、全体的に怪談とはいいながらも優霊物語（ジェントル・ゴースト・ストーリー）と呼ばれる種類の作品を多く書く事が注目される。また、現代をテーマにした怪談もある程度は書いているが、今回の『エムブリヲ奇譚』の様に時代物の設定を生かした物語の方がえてして、全体の完成度は高い様に思われる。また、怪談の分類上は明らかにフィクションとして位置付ける事が出来る。

2. 『エムブリヲ奇譚』各論

これから、『エムブリヲ奇譚』の各作品について担当者の見解を交えつつ論じて行きたい。基本的には物語が怪談・幻想小説・ホラーとして成立していると考えられる構造を中心に話を進めて行きたいと考えている。（時間の都合で省く部分がある可能性もある・また、各論部分はまず間違いなく重大なネタバレを行っているので、該当作品を読んでからレジュメを読む事をお勧めする）

A : 「エムブリヲ奇譚」～きみ、そいつはエムブリヲというやつだよ～

エムブリヲとは、英語の **embryo** の事と考えられる。この語彙は妊娠三か月目前半までの胎児に適用される物である。今回の物語では、この胎児は墮胎所から川を伝って流れてきた所を主人公に助けられるという構造を持っている。墮胎所から捨てられて来たという時点で、生まれて来る事を望まれて出て来たのでは無く、その存在は限りなく死に近い。しかしながら、主人公が助けたエムブリヲは「たまたま、生きのびようとする力が強かった」がために他のエムブリヲとは違い生きる事が出来たとされている。しかし、一度殆ど死の存在に近くなったエムブリヲは既に異界の存在と位置づける事も出来るだろう。だからこそ、米のとぎ汁を僅かにすすって生きる事が出来たし、拾った主人公である耳彦をして「これが人間になるなど想像できなかった」というセリフを吐かせる原動力ともなったのだと思われる。

また、この幻想小説の構造上の問題を指摘するならば、主人公が異界の存在であるエムブリヲを拾ったのは正に主人公にとって異界の川辺（川も古来よりあの世とこの世を繋ぐ通路の一つと考えられて来たというのは意味深である）での事であった。普通なら、この異界の存在はこの世に連れ込まれた時点でその存在を抹殺されてもおかしくは無い。ところが、このエムブリヲは抹殺されるどころか最終的には人間の少女となって主人公の元に現れるのである。つまり、この物語は一度望まれない存在として抹殺されかけたエムブリヲという異界の存在がもう一度人間としてこの世へ生まれ変わる過程を描いた作品であると読み取る事も可能なのである。

- ・ 死の存在から正の存在への帰還という構造
- ・ エムブリヲを人間にする事が出来た二つの条件
- ・ 見世物小屋と主人公と博打の元締めと

B : 「ラピスラズリ幻想」～自分の感じたような幸福が、母のこの先に訪れますように～

ラピスラズリに関しては、取り敢えずパワーストーン的な意味合いだけを最初に押さえておきたい。日本では、極楽浄土を飾る七宝の一つである瑠璃とされており、世界各地でも聖なる石として伝説や信仰の対象となっている様である。世界で最初に所謂「パワーストーン」であると認定された石もどうやらこのラピスラズリである様だ。

この様な、聖なる石とされるラスピラズリが今回の作品では非常に大きな役割を与えられている。その力とは、何度も同じ生を生きる事が出来るという物である。だが、それには禁忌の様な物も共に付属しており、それは主人公の輪（輪廻をテーマにした物語に相応しい名前である）が老婆から薬を与えたお礼としてこのラスピラズリを貰う際に「自ら死ぬことだけは、してはいけません。もしも、自分から死のうとすれば、地獄に墜ちるでしょう」と言われている様に、自殺だけはしてはならないという物であった。だが、結局輪は最後にはこの戒めを破って自分から死を選び、地獄に墜ちる事となる。勿論、この最後の結末までには様々な葛藤があり、最初は輪も「自分のあさましさに愕然となる」ものの「ラピスラズリを手放すのがこわかった」とある通り、生への執着、死の恐怖が強かった。ところが、段々と生を繰り返して行く内に彼女は母という物の存在へと注目をして行く事となる。この輪と母との関係がこの物語の中では重要な役割を持っていると言う事が出来るだろう。

- ・ラピスラズリの力について

- ・凛と母の関係

C:「湯煙事変」～湯煙の中で温泉の端が消えていた～

今回の作品で注目したいのは、怪談で良く扱われる「同空間内での日常と非日常の反転」という原則が適用されている点である。主人公の耳彦が和泉蠟庵と共に何時もの迷い癖でやって来た村には、温泉があった。二人が泊まった宿屋の主人曰く、その温泉には「夜には行かないほうがいいでしょう」との事。というのも、「もどってこられなくなる人」が多く、温泉に入った「次の日、脱ぎ捨てられた着物だけが温泉のそばで見つかるのです」との事。その事実を調査するために和泉蠟庵は耳彦に夜中の温泉へ浸かせようとするが、彼は一度は拒否する。だが、その夜に風の被害が甚だしく、蠟庵から風よけの苦参を貰うという約束で翌日の夜に耳彦は温泉へと入る。

ところで、この夜の温泉の前に二人は一緒に昼間の温泉に浸かっている。ところが、その時には「なにも問題は起こらず、温泉を堪能して」いるのである。ところが、夜に入ると耳彦は死んだ筈の知り合い（父母や友人達）をその温泉で影と音だけながら目撃する。しかも、その温泉は昼間入った時よりも面積が明らかに広がっており、耳彦は湯煙によっていつしか現世への出入り口である「着物を脱いだ岩場」を見失い、「前後左右、濃密な白い湯煙がたちこめており、足元にほどよい湯加減の温泉があるだけ」の状況で死人たちと湯を共にする事となる。この様に、昼間は何の問題も無かった温泉が夜には知り合いの

死人達が浸かりに来る非現実的な空間へと変化しているのである。この手法は怪談実話においてかなり良く使われる物である。(例えば、昼と夜の学校・夕暮れ時の団地等)では、基本的な手法を確認したので、これから細かい点について少しだけ言及してみたい。

- ・夜の温泉で耳彦が居た場所（日本的な異界の表現について）
- ・夜の温泉でのゆのかの役割
- ・死者の街の中に存在する異界という二重構造について

D:「メ」～自分の行いに対する恐怖は、ふくれあがるばかりだった～

おそらく本作品は『エムブリヲ奇譚』中の白眉、更に言うならばこれまでの山白朝子作品の中で最も完成度の高い作品となっているのではないだろうか。旅の途中に出会った白い鶏に耳彦は茶飯を与え、それが縁で和泉蠟庵と耳彦はこの鶏と一緒に旅をする事となった。耳彦はこの白い鶏に対して小豆という名前を付ける。この鶏は鳴く声は「笛の音色のような、美しい声」と表現され、「白い羽にはくもりがなく、外見は優美」でいながら、「どこか間が抜けて」いるともされている。この二人と一羽はそのまま旅を続け、とある村へと入り込む事となった。その村では、あらゆるものに人の顔が付いており、それは魚介類や穀物も例外では無かった。耳彦はその食べ物を気味悪がり口にしようとしませんが、和泉蠟庵の方は「ただ、人間の顔に似ている、というだけ」で普通の魚であったり食べ物であると言って耳彦の言葉には耳を貸さない。そうして、その村で一日を過ごし二人は小豆と共に村から立ち去ろうとするのだが、途中の道が土砂で通行止めになっており進む事が出来ない。そこで仕方なく村へと戻るがその後に二人は風邪を引いてしまい何日も足止めを喰う事になってしまう……。

和泉蠟庵にとっては、「人間の顔に似ている」だけである食物が耳彦にとっては「人間そっくり」に見えてしまうという認識のコントラストは鮮やかである。だが、この作品が非常に優れている点はずっと別の所にある。それは、今回の作品は怪異の恐怖をベースにしているのではなく、耳彦が最後にとってしまう究極の選択にある種の恐怖を配置しているという点である。人間そっくり否、人間そのものと耳彦が考える物を食べる、つまり同族を食べるといった感覚への嫌悪の為に、ずっと連れだつて来た美しい鶏である小豆を殺して食べてしまうという人間が自分の為に行う事の出来る残酷で自己中心的な行為に関する恐怖を描きだしているという点がこの作品の根幹と言っても過言では無いだろう。以下、もう少しだけ詳しく見て行きたい。

・閉じられた構造（耳彦と小豆）

E:「あるはずのない橋」～橋がある。あれは刎橋だ～

今回の作品は、正統派の怪談と位置付ける事が出来るだろう。耳彦と和泉蠟庵は霧の中を彷徨う内に見事な刎橋に行きあたる。普通はせいぜいが数本の刎ね木が、「この橋の場合、五十本以上はある」と思われるような物である。和泉蠟庵は喜んでこの橋について記そうとするが、その後に宿った村長の家で働く召使いの老婆に、あの橋は「ごくまれに旅の人が夜に見る」が「四十年も昔に、落ちてしまっている」あるはずのない橋であると言われ、「喜び損になってしまった」と落胆する。対して、耳彦は蠟庵に「橋の幽霊ということでしょうか」と尋ね、「もしも渡っていたら、どこに着いていたのだろうか」と考える。そしてその晩、耳彦は召使いの老婆の頼みで夜の刎ね橋へと向かう事になるのであった……。

この物語において、恐怖のポイントとなっているのは「良い話」と思わせておいて最後の最後でフェイントをかけるという手法にあると思われる。老婆の「四十年ほど前に、私が叱って、左腕をたたいた」自分の息子との生と死を越えた感動の対面といった表面上の演出を行いながら、結局は死者の「生きている者に対する憎しみ」というある意味理不尽な理由によって老婆が連れ込まれる姿を描く。その過程において「あの子に赦しを請いたい」そうしなければ「私は、死んだあと、きっと地獄に墮とされるにちがいない」と自分の救済という俗的ながらも瀟洒な動機を説明していた老婆に「いやだ。行きたくない。まだ、行きたくない」という生への執着以外の何物でも無い台詞を叫ばせ、「私は、ただ、母と子が再会して、抱き合うさまを見たかっただけ」であったと主張する（その前に金に釣られている時点で俗的な面も否定は出来ない）耳彦の偽善的な醜さをも「離しやがれ！婆あ！」という象徴的な言葉と共に露呈せしめ、生と死の両陣営の醜さ、愚かさを見事に描き出している点は、注目に値するだろう。

・橋の異界性について

F:「顔無し峠」～それなら、二人が同一人物だということも……～

この作品を論じるときに構造的に類似しているという点で考察すると面白いと思われるのは、吉屋信子の「生魂」である。これも、今回の作品と殆ど同じテーマを扱っている。つまり、死んだと思っていた人間と瓜二つの人間が表れた時にどの様な事が起こるのかと

いう物である。だが、此処では其処まで論じている暇は無いと思われるので、もっぱら作品内の問題にだけ焦点を当てて話をして行きたい。

和泉蠟庵と耳彦が何時もの様に道に迷っていると、たまたま通りがかった山菜取りの男に行き会う。そこで彼に助けを請うのだが、山菜取りの男は近づいて来て耳彦の顔を見るなり、「喪吉でねえか！」と叫んで地面に膝をついて、両手をあわせる。実は、耳彦が一年前に死んだ喪吉という男に瓜二つであると言うのだ。だが、耳彦は自分は喪吉では無いと言ってそのまま村へと入る。だが、そこで泊まろうと思った宿には喪吉の妻であるやゑがおり、顔どころかその身体の細部、そして性格、喪吉が生きた生涯までもが類似している耳彦はやゑの家で喪吉の子どもである鼻太郎と共に暮らす事となる……。

この物語では怪異という物は一切起こってはいない。唯単に偶々顔も体の細部も性格もその生涯の軌跡も同じである男が二人いた、というだけの話であると言えば事は簡単であろう。だが、この物語で重要となるのは耳彦が耳彦という男の顔を捨てて喪吉という男になろうとするのだが、結局喪吉の妻であり、耳彦を喪吉として扱おうとしたやゑ本人によってそれを阻止されるという点である。この物語に流れる雰囲気はどこまでも優しくそして切ない。耳彦は喪吉となる事で「エムブリヲ奇譚」の時には得る事に失敗した家族を手に入れようとするのだが、それは結局またもや失敗する事となる。全てが同じであるからと言って死人と同一化する事は、耳彦自身の死を暗示していると考えられる。だが、耳彦はそれをやゑや鼻太郎と暮らすという経験を通して良しとし、真夜中に喪吉がやっていたという大工の仕事の練習をする。「釘の打ち方を、わすれてしまったから、今のうちに練習しようとおもってね。そうしておかないと、これから、やっていけないだろう」と言っている耳彦はもう耳彦である事をやめて喪吉として生きる事を決意している。和泉蠟庵がその翌日には旅立ってしまうのだから、彼だけを旅立たせれば耳彦は死ぬまで喪吉として生きる事が出来ただろう。そして、大工の練習をし続ける事で耳彦はついに「釘の先端が薪に刺さる」「ななめにかしいでない」様に釘を刺す事が出来る。あとは「力をこめて打てばいい。金槌を釘にむかってふりおろすだけでいい」のだ。そうすれば、耳彦は喪吉となる事が出来、自分の顔を捨てる、もっと言えば顔無し峠で死んだ顔の分からない（言い換えれば顔の無い）男を喪吉から耳彦へとすり替える事が出来ただろう。だが、それをやゑはすんでの所で止めさせる。「ほんとうはね、最初から、わかってたんだよ」と。やゑは初めこそ喪吉が帰って来たという幻想を信じようと思ひ、それはもう少しで叶った訳だが、結局幻想を振り切る道を選ぶ。その苦渋に満ちた決断がいかばかりかと考えるとき、やゑが嗚咽をもらしながら話す言葉が読者の胸を打つのではないだろうか。「あの人と、いっしょになれて、しあわせだった。でも、もうどこにもいやしないんだ。もう旅からもどってこないんだよ。あんたが、あの人じゃないってことは、わかっていたんだ」

以下、細かい点について触れて行きたい。

- ・現実の勝利と幻想の敗北（やゑによる幻想の打破）

G:「地獄」～余市という男は、もういなくなった～

此処で話すべき事は殆ど何も無い。というのも、この物語では怪談的な怪異は全く起こる事無く、唯々延々と人間の恐ろしさ、人間が作り出す地獄の描写が続くのみであるからだ。この『エムブリヲ奇譚』内では珍しく、この作品は所謂人間自身の恐怖を描いたホラー小説なのである。読者は耳彦が落とされた穴の中が少しずつ、しかし確実に地獄へと変化していく過程を見守り、しかるべきカタストロフへと突き落とされる感覚を味わう他には無いだろう。

和泉蠅庵と耳彦の二人は足をくじいたという女に薬を与える。女はそのお礼に良い温泉を知っているから教えようと言って彼らを誘い出す。だが、其処で待ち構えていたのは「武器などなくても、素手で私たちを殺せるような大男」であった。その場で耳彦は山賊が従えていた少年によって気絶させられ、彼らが作った人間を閉じ込めるための蛆虫だらけの穴へと落とされる。其処が幾重もの絶望の扉を開く地獄の舞台だとも知らずに……。

この物語でとりあえず注目しても良いのはDの項目で説明した「メ」との関係性である。耳彦は其処で人間の顔とそっくりの魚や米等を人間が人間を食べるという共食いの嫌悪感から拒否をし、最終的に一緒に連れ立っていた小豆という鶏を食べる事となった。だが、この「地獄」ではその様な耳彦が最後まで守り通そうとした「プライド」はいとも簡単に崩され、彼は一緒に囚われていたふじの肉（ふじが殺される以前はそれまでに殺されていた旅人達の肉）を気づけば食べさせられていたのである。この部分に関しては後で別に項目を立てて補足をしたい。

ところで、この一線を越えていた事に気づかされるまでの描写は素晴らしく、そして凄まじい。「おまえらに三人分の干し肉をわけてやるのが惜しくなったんでな」という山賊の父親の発言によってふじは一瞬助けられたかの様に思われたのだが、直ぐにその日の内に異変が起こる。それまで食べさせられていたのは固い干し肉であった物が、「しかしその日の肉は、乾燥させておらず、切り取ったばかりのものを、焼いたものだった」と描写され更に、それをばらまいた山賊の女は何故かいつもどおりのにやついた表情をしている。耳彦と余市は胸騒ぎを覚えて女にばらまかれた肉に口を付けることが出来ない。そして更に時が経って、ある時山賊の女が余市がふじに送ったらしき赤い帯をしめている事に気が付く。だが、それでも耳彦は余市にそれは見間違いだと言って慰めるが、その様な表面的な慰めは翌日には見事に崩される事となる。山賊の少年がいつもの様に耳彦達に石を投げて遊んでいたのだが、彼らが石に当たっても無反応な事にいらだって、「ふじの顔の皮膚を剥いでつなぎあわせた覆面」をかぶって二人を嘔し立てたのである。この作品では、この様な絶望が何重にも巡らされて最後のカタストロフへと持ち込まれて行く点が圧巻であると思われる。以下、その事についてもう少しだけ構造的な面から説明を加えたい。

- ・「地獄」を作り出すための絶望の配置方法
- ・「仄」と「地獄」の関係性
- ・人間が作り出す恐怖について

H:「櫛を捨てはならぬ」～お母さんの死体は、とてもうつくしかったです～

今回の物語は、正統派の怪談として考える事が出来る。今回、耳彦と一緒に旅をするのでは無く、完全に聞き役に徹し、話の進行は専ら和泉蠟庵の語りによってなされるという構造となっている。内容は至って簡潔に言えば、和泉蠟庵と共に旅をする事になった怪談好きの青年が奇妙な髪の毛につきまといわれ、最後には変死してしまうという物である。この髪の毛の怪異は櫛という物を媒介にして発生している。この櫛には和泉蠟庵が言っており、苦死に通じるという俗信があり、捨てる事を忌む風習がある。この櫛を媒介として青年の周りで怪異な事が巻き起こる。

最初青年はそれを連れの和泉蠟庵の長い髪の毛のせいだと主張するが、別々の部屋に寝て密室の状態にしても髪の毛が青年の周りにばら撒かれる事から、その考えは撤回する。だが、その話をして席を離れた青年の後には、畳に「まるで死人の髪の毛のようにくすんでいた」和泉蠟庵の髪の毛とそっくりな長い髪の毛が残され、更には、温泉でも長い髪の毛に付き纏われ、それによってふさぎ込んでいる青年を連れて行った名物の団子屋では、「青年の眼球と眼窩との隙間から細長い髪の毛がするするすると」のびて出て来るといふ始末であった。この髪の毛の描写は執拗であり、どんどんと読者を不安の渦中へと突き落とす効果があると思われる。そして、その後青年は実は前の宿で櫛を拾い（実はそれはとあるお婆さんの持ち物であったらしい）、おまじないとして足で踏んづける事無くそのまま盗んでしまったのだという。それから髪の毛の怪異に悩まされる様になったのだと主張する。「先生、きっとあの髪の毛は、僕が盗んだ櫛と無関係ではありません。僕を責めているのでしょうか」といった直後に、青年はフラフラとその場を離れ、あろうことか宿屋の庭先でたき火をしてその櫛を炎の中に入れてしまう。その時に青年は「炎を目の中につりこませて、にやにやとわらっている」といふ状況であった。そして、次の日に青年は髪の毛を口の中一杯に詰めた状態で変死体となって発見されたのであった……。

話しの大雑把な粗筋は以下の通りであるが、これからこの物語が怪談として成立していると考えられる構造を中心に話を進めて行きたい。

- ・母親の影

- ・語りという手法

- ・和泉蠟庵の推理について（怪談におけるミステリ的手法の導入）

I: 「「さあ、行こう」と少年が言った」～さあ、行こう。おねえさん～

旅という行為が日常から非日常へと向かう行為だと規定するならば、非日常へと向かいそのまま非日常の世界へ留まれば、その人間にとってはその非日常こそが日常へと変転するのではないだろうか。今回の作品は旅をテーマにした幻想譚の最後を飾るに相応しい作品である。この作品において重要視されるテーマは三つある。一つは天狗の神隠し、二つ目は「逃げる」という行為、そして三つ目は和泉蠟庵少年の（この際、少年と蠟庵とが同一人物か否かという議論は面倒なので割愛する）存在の意義についてである。この三つを順番に見て行きたい。

その前に、基本的な物語の構造を把握しておくならば、小作人の娘である主人公は地主の家へと嫁ぎ、様々ないじめにあうという境遇に置かれている。それは過酷な状況であり、最愛の両親の最後を看取る事も許されず、母親の形見（これは後で述べるが一種の象徴と捉える事が出来る）までも夫の家族に奪われてしまう。そんな中で、土蔵の中で主人公は不思議な少年と出会う。彼曰く迷子になったというのだが、どう考えても土蔵の中で迷子になる余地は無い。だが、彼には不思議な迷い癖という性質があり、それ故に色々な場所に迷い込んでしまうらしい。そんな彼との不思議な交流を何度か続けていたのだが、ある日突然夫の家族（祖父）の告げ口によってこの二人の関係は強引に絶たれてしまう。少年を泥棒だと考える家族は、少年を土蔵の中へと投げ込み、主人公にも厳しい詮議をする。だが、そうしている内に少年は土蔵から忽然と姿を消してしまうのであった。家族に罵られ蹴られる中で主人公は自分悪いのだという錯覚に陥りかけ、段々と人の心までも無くして行く事となる。その後、主人公は前よりも理不尽な境遇となり、今にも死ぬのではないかという状況にまで追いつめられる。だが、そんな主人公の壊れそうな心を支えたのは少年から学んだ文字というコミュニケーションツールであった。心に思ったことを「伝えるべき相手も」おらず、「伝えるべき心もなくなりつつある」という極限の状態の中で、主人公は最後にはもう一度少年の不思議な力によって内から外への脱出を試み、見事に成功するのである。これが大雑把な物語の概要であるが、以下に論点を整理して順に話をして行きたい。

- ・神隠しの二重構造（少年の性質と物語全体の構造）

- ・「逃げる」という行為の意義と責任（アニメ『モノノ怪』との比較による）

- ・和泉蠟庵少年の存在の意義

3. 『エムブリヲ奇譚』その他

此处では、各論では触れられなかった『エムブリヲ奇譚』に関しての些末な点について、時間の許す限り話をして行きたい。

- ・時代小説的な怪談・幻想小説について

- ・各話の分類について

- ・和泉蠟庵と耳彦の類似点と相違点

- ・旅という行為について

- ・家族に関して

4. 最後に

今回の例会で『エムブリヲ奇譚』を題材にする事により、ホラー・怪奇小説・幻想小説・怪談といった現実と非現実の関係性を描く物語群（これ自体が相当乱暴な規定ではあるが）の表現の仕方等がどの程度伝わったのかは判らない。とはいえ担当者としては、ミステリ研究会の面々がミステリ以外のジャンルについてもその作法・表現方法等を知る事で逆にミステリという物の本質を知る手掛かりの一端を知る事が出来るかもしれないという事について知って貰えれば幸いだと考えている。また、ある程度この手の作品を読んでいる人にも少々強引ではある物の新しい視点を一つでも提示出来ていれば幸いである。この例会を契機にしてこの手の作品に興味を持ち、自発的に探究してくれる会員が一人でも増える事を願う次第である。

また、最後に余談ではあるが今回の例会は乙一という作家の性質を多方面から解析するという企画の一端でもある。乙一を読まれている向きは、この山白朝子という名義で乙一が描いた物語群がどの様な位置を乙一の作品群の中で占めているのかを考えて見るのも良いのかも知れない。

5. おまけ

此処では、これを読んでおくと大体现在の怪談業界の状況が把握出来るのではないだろうかと考えられる本などを少しだけ列挙して行く。(怪談論理・怪談史系統は省いた)

A：怪談フィクション

- ・有栖川有栖『赤い月、廃駅の上に』『幻坂』
- ・綾辻行人『眼球綺譚』『深泥丘奇談』
- ・黒史郎『夜は一緒に散歩しよ』
- ・勝山海百合『十七歳の湯夫人 (マダムタン)』
- ・長島楨子『遊郭 (さと) の話』
- ・岩井志摩子『ぼっけえ、きょうてえ』
- ・宮部みゆき『あやし』『おそろし』
- ・京極夏彦『幽談』『冥談』『眩談』
- ・浅田次郎『あやしうらめしあなかなし』
- ・東雅夫編『文豪怪談傑作選』シリーズ (全18巻)・『世界幻想文学大全』 (全3巻)
- ・小島水青『鳥のうた、魚のうた』
- ・岡部えつ『枯骨の恋』
- ・神狛しず『京都怪談 おじゃみ』
- ・森山東『お見世出し』
- ・恩田陸『私の家では何も起こらない』
- ・井上雅彦編『異形コレクション』シリーズ

B：怪談実話系

- ・雀野日名子『あちん』
- ・『怪談実話系』シリーズ

C：怪談実話

- ・稲川淳二『稲川淳二のすごーく怖い話』シリーズ
- ・木原浩勝・中山市郎『新耳袋』シリーズ
- ・福澤徹三『怪談実話 黒い百物語 叫び』
- ・平山夢明『顛 (こめかみ) 草紙』シリーズ
- ・『怪談実話コンテスト傑作選』シリーズ
- ・『女達の怪談百物語』
- ・『男達の怪談百物語』
- ・安曇潤平『赤いヤッケの男 - 山の霊異記』
- ・小野不由美『鬼談百景』『残穢』